

ワーグナー時代の「ライトモチーフ」受容

岡田安樹浩

「ライトモチーフ」(=LM)はワーグナーの生前からさまざまに解釈されていた。1860年、A. W. アンブローズは著書『現代音楽界の文化的光景』のなかで、リストの交響詩《タッソ》における主題の変容回帰の現象を説明するための詩的・隠喩的表現としてLMという言葉を出した。しかし、この言葉が広く用いられるようになるのは1860年代末になってからであった。F. W. イェーンズが『作品におけるウェーバー』(1871年)においてLMを「回想モチーフ」の同義語として用いて以降、この理解と用法が広まったが、その一方でワーグナーやリストの作品におけるモチーフの変容回帰のことをLMと呼ぶ論者もいた。

1876年のバイロイト祝祭を契機として、LMはワーグナーの楽劇に関連する文脈で用いられる傾向が強くなった。特にE. ハンスリックに代表される反ワーグナー派の論者は、H. v. ヴォルツォーゲンの『主題の手引書』(1876年)において解釈・命名・番号づけされたモチーフのことをLMと呼び、この言葉に新しい意味を付与した。そしてワーグナー自身も『音楽のドラマへの応用について』(1879年)において、LMをこの意味において使用した。その一方で、ワーグナー讃美者のJ. v. サンテン・コルフは、LMはワーグナーの後期作品に特有のものであり、回想モチーフとは似て非なるものだと主張し続けた。

1880年の『グローヴ音楽事典』において、LMは初めて音楽事典に立項された。しかしそこでの説明は、オペラやオラトリオにおける回想モチーフであると同時に標題交響曲におけるイデー・フィクスでもあり、ワーグナーの後期作品における作曲原理でもある、と多義的であり、フーゴ・リーマンの『音楽事典』(1882年)でも、当時あったさまざまな理解が網羅的に列挙されている。これらが、ワーグナー死後の音楽事典や文献のなかで流布していったのである。